

ADHD児に対する着席行動への教育的介入

Educational Intervention to the Sitting Behavior of Child With ADHD

○下津 紗貴¹・川原 優香²・佐藤 容子³・佐藤 寛⁴

(¹宮崎大学大学院教育学研究科、²日知屋東小学校、³宮崎大学教育文化学部、⁴関西大学社会学部)

Saki Shimotsu, Yuka Kawahara, Yoko Sato, Hiroshi Sato

Graduate school of Education, University of Miyazaki・Hitiyahigashi Elementary School・

Faculty of Education and Culture, University of Miyazaki・Department of Sociology, Kansai University

キーワード: ADHD, コンサルテーション形式での介入, 機能的アセスメント

問題と目的

発達障害のある児童生徒は、特別な対応を必要とする行動特徴を示すことが多い。よって、発達障害児が通常の学級に在籍する場合、担任教師は、学級全体の指導をしながら一人ひとりに応じた対応の仕方について考えていく必要があり、その負担は大きい。近年では、担任教師の負担感を軽減する取組みとして、コンサルテーション形式での介入研究が注目されている。また、発達障害に対する効果的な介入方法として、機能的アセスメントを用いた介入が挙げられる(野口・野呂, 2006)。

そこで、本研究では、多動傾向のある小学1年生の男児を対象に、機能的アセスメントに基づいたコンサルテーション形式の介入を行ない、その効果を検討する。

方法

1. 対象児

公立小学校の通常学級1年に在籍する、生活年齢6歳10ヶ月の男児1名。6歳9ヶ月時に、ADHDの特性が目立つウイングアスペルガーとの診断、5歳6ヶ月時に受けた田中ビネー知能検査では、IQ=118で、知的には正常域。行動特徴としては、自分がやりたいことを優先してしまう、授業中の離席や出し抜けに発言することが挙げられる。

2. 標的行動

行動観察を行った結果、対象児は、授業開始時になんでも遊び続けることが多かったため、チャイムで着席する行動を標的行動とした。

3. 介入計画

行動観察の結果から、標的行動についてABC分析を行った(Table 1)。以上の結果より、標的行動に関して「途中でやめたくない活動に熱中している時、チャイムが鳴っても活動を続け、その結果、活動の継続や周囲からの注目を獲得している」という仮説を立てた。

そこで、チャイムで着席する行動を増やすため、トーケンエコノミー法を用いた。また、時間の見通しを立てさせるため、休み時間開始時に時計カードを示して声かけを行った。

先行事象	行動	結果
遊びに熱中している時にチャイムが鳴る	チャイムを無視して遊びを続ける	好きな活動や、教師、他児童からの注目を獲得

Table 1 標的行動のABC分析

4. 介入の手続き

授業開始のチャイムで着席できたら、がんばりカードに○を1個つけ、4個たまると虫のカードを獲得できるシステムにした。1日を1セッションとし、1日に最大4個の○を獲得できる。4個たまると、特別支援学級の担任から虫のカードを与えた。これは、対象児が学習用具の紛失が多いことや、学校に不要なものを持ってくることが頻繁にあったため、教師の目が行き届き、他児に見せることのできない特別支援学級内でのやり取りがよいと判断されたためである。さらに、○1個ごとに、筆者と学級担任から賞賛を与えた。また、標的行動獲得のためには家

庭での強化が重要であると考えた。そこで、連絡帳を通じてカードの獲得状況や対象児の行動について課程と連絡を取り、母親からの賞賛も行った。

5. 測度

1) 行動観察、2) 行動面の困難を測定する教師評定尺度:「不注意」「多動性・衝動性」それぞれ9項目の計18項目

結果

1. 行動変容

チャイムが鳴ってから着席するまでの時間は、ベースライン期では変動が激しかったものの、介入期に入つてからはほとんど1分かからず、安定していた(Figure 1)。

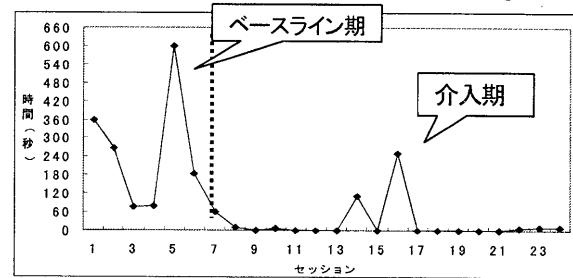


Figure 1 チャイムで着席するまでの時間の推移

2. 教師から見た行動変容

「面と向かって話しかけられているのに、聞いていないように見える」と「他の人がしていることを遮ったり、邪魔したりする」の項目で改善がみられた。

考察

本研究では、多動傾向のある小学1年生の男児を対象に、機能的アセスメントに基づいたコンサルテーション形式の介入を行ない、その効果を検討した。その結果、ほとんどチャイムと同時に着席できるようになった。よって、機能的アセスメントに基づいた効果的な介入が行なえたといえる。コンサルテーション形式での介入としては、着席行動に対する担任の賞賛を重視した点や、特別支援学級での即時のバックアップ強化子の提示も効果を高める要因になったと考えられる。このように、様々な人が役割を分担することにより、担任の負担を確実に減らしつつも、効果を得ることができている。

さらに、教師から見た対象児の行動の様子の得点の変化や、認知面への般化はみられなかったが、トーケンによる強化のない掃除開始のチャイムも守れるようになつたとの報告があり、行動の般化がみられている。また、クラス全体でも時計カードに従つてチャイムで着席する児童が増えていた。このように、クラス全体で取組むことができれば、対象児にだけ特別に対応する機会も減り、教師の負担が軽減されるのではないだろうか。

引用文献

野口美幸・野呂文行 2006 注意欠陥/多動性障害(ADHD)児に対する機能的アセスメントを用いた介入—けんか低減の試み— LD研究 15, 339-345